

（一社）日本経営協会講師 中本正樹氏による演題「読まれる議会広報紙の作り方」、（公社）日本広報協会広報アドバイザー 平本久美子氏による演題「パッと伝わる広報紙に！やってはいけないデザイン講座」、埼玉県寄居町議会広報公聴特別委員会委員長 鈴木詠子氏による演題「「読まれない議会だよりに出す意味なし」聴く・動く寄居町議会の挑戦」の聴講。

「読まれる議会広報紙の作り方」のポイントは以下の通り。読者である住民の行動変容（心の変化・行動の変化）を促す内容となっているか。読者である住民の視点で作られているか（住民にわかりやすいか）。

広報がまちを活性化する仕組みとして「まちを知る」⇒「発信する（話す・書く）」⇒「喜ばれる」⇒「もっと知りたい」⇒「まちを知る」の循環の中で、仲間が増える、「まち」に関わる人、「まち」のことを自分事にする人が増えることが重要。

「わかりやすさ」として、意図した表紙（何を伝えたいか）、多様な視点（くまなく調べ、全体を俯瞰し、流れをつかみ、発想を崩す）、記事の書き方（逆三角形で書く、最も重要なこと（いつ・どこで・誰が・何を）、次に重要なこと（なぜ・どのように）、付けたし（補足））が大事。

「パッと伝わる広報紙に！やってはいけないデザイン講座」のポイントは以下の通り。デザインの前に「ターゲット」の特定することが重要。議会広報紙であれば「全住民」ではなく「無関心層」とし、興味を引くテーマで巻頭特集を企画するなど、広報紙を開く「きっかけ」を作る。

目立つ！レイアウトの鉄則として、主役を大きく作る、大きさにメリハリ、主役の材料である簡潔なタイトル、強いキャッチコピー（ターゲット目線）、質の高いイメージ画像が重要。

3つのデザインルールとして、ジャンプ率を上げる（本文の文字サイズに対する見出しサイズの比率）、フォントは適材適所に（本文＝標準のゴシック体・明朝体、アクセント＝手書き・个性的フォント）、余白を作り整列させる。

「「読まれない議会だよりに出す意味なし」聴く・動く寄居町議会の挑戦」のポイントは以下の通り。寄居町議会では、議会活動の見える化を課題とし、広聴機能を強化。

まずは住民に興味をもって手に取ってもらえる広報紙に。町民の声を掲載、予算・決算・重要案件には必ず議会と町民それぞれの視点を掲載することや、声メーター（住民の一言コメントの累積数掲載）などの町民参加。

政策サイクルを意識した編集、それをわかりやすく町民に伝える

予算 ⇒ 監視 ⇒ 決算 ⇒ 提言 ⇒ 予算

↓
報告

↓
報告

=議会報告会

議会全体を見せることが目的のため、一般質問原稿は1人180字。詳細は各議員がSNS等の媒体で個別に対応。

編集方針の設定が非常に重要。

以上、3講演の内容から、議会広報紙制作にあたって最も重要なのは、読者である住民の行動変容につながる内容であるか、読者である住民の視点でつくられているかであり、その前提として、広聴活動の充実による住民の視点の把握、地域課題の特定がなされ、どのような行動変容を促すべきかという方針を定め、その方針に従った紙面をつくっていくことであるとする。

八丈町議会の議会だよりの現状は、残念ながら上記の様な方針や視点に基づいた紙面とはなっていないと考える。徐々に方向性を意識した紙面となつてはいるものの、議会全体としての問題意識を明確にし、特定テーマの連載記事、政策サイクルを意識した内容とする必要があると考える。

現在、議会広報紙の作成は、議会だよりの編集委員が担当しているが、充実した紙面作成のためには充実した広聴活動が前提であると考えれば、今後は、広報・広聴委員会（特別・常任）を設置し、広報・広聴活動を一体として取り組むべきと考える。